

昨年からはまった APMoA Project, ARCH。今年度の第一弾としてご紹介しているのは、藤永覚耶（ふじなが・かくや）さんです。



(撮影：林育正)

藤永さんは、滋賀県大津市生まれ。京都嵯峨芸術大学で学ばれた後、愛知県立芸術大学大学院に進まれました。現在は、大津市のアトリエで作品制作を続けています。このブログでは、藤永さんのアトリエの様子をお伝えしつつ、藤永さんの独自の制作手法をご紹介します。

藤永さんは、写真のイメージを元に平面作品を制作してきましたが、近年は、アルコール染料インクで画像を描き、そのインクを溶かすという方法により、独特の揺らぎを感じさせる絵画を作り出しています。その制作手法ではまず、ある写真のイメージを、アルコール染料インクを用いて、点描で綿布に移し変えていきます。点が打ち易いように、ペンタイプのものを選び、さらにペン先のスポンジを自分で成形して使っておられます。



△藤永さんの使うアルコール染料インク。

また、既成のインクだけでなく、これらをさらに調合して、よりイメージに合った色を作ります。



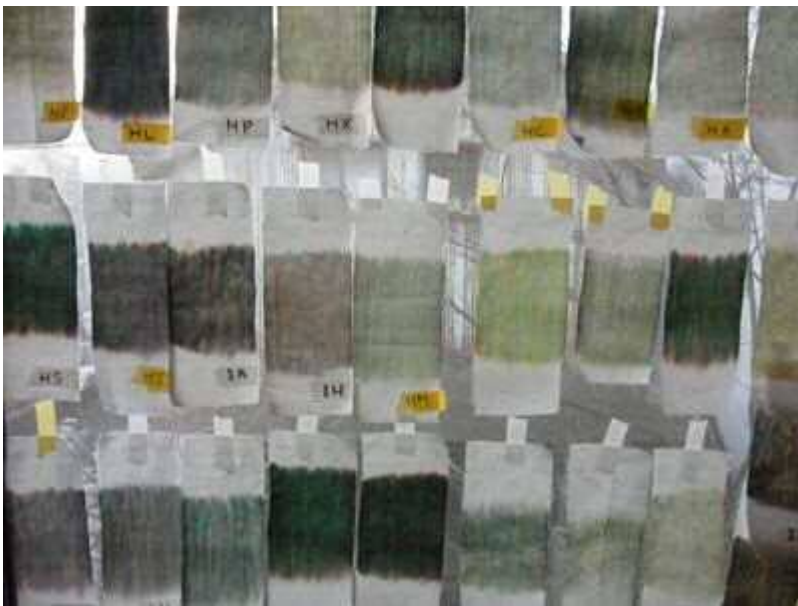
△こんな風に色の調合もされています。

藤永さんによると、制作のほとんどの時間が、この点描のプロセスに費やされるとのことです。今回は、美術館の展示室に合う大画面の作品を制作してもらったので、さぞかし時間がかかったことでしょう

点描ができれば、最後の工程へ。ここで、インクの溶剤であるアルコールを霧吹きで上から吹きかけます。そうすると、アルコールがどんどん綿布に浸透して、インクが溶け出していきます。画面の上か

ら吹きつけたアルコールが重力によって下へ落ちてくるに従い、インクもそれに応じた動きを見せます。インクを溶かす途中の様子は、藤永さんのブログでご覧いただけます。

このアルコールを吹き付ける工程で、作品の様子はまさに一変。興味深いのは、同じようにアルコールが通過した部分でも、使うインクの色や組合せによって、溶け方が異なってくることです。藤永さん曰く、何度もこの手法を研究する中で、どの色やどの組合せが溶けやすく、また溶けにくいかということがだんだん分かるようになってきたとのこと。その過程を垣間見せるのが、アトリエにあるたくさんサンプルです。実作品を制作する前に、小さな綿布に点描を施してからアルコールで溶かしてみても、どのような溶け方をするか、また色が混ざってどんな色になるか、ということを見るためのものです。



△微妙に異なるサンプルがたくさん。

もちろん、このようにサンプルをたくさん作っても、溶かす過程で思いがけない結果が現れることもあります。最終的な作品の外観は、制御された色の配置と偶然による効果の合わさったものとなります。こうして完成する作品は、どこか焦点の定まらないイメージとなります。近づいてよく見ようとするほど、イメージはぼやけていき、一瞬めまいのような感覚さえ覚えることでしょう。逆に、作品から離れてみると、馴染みのイメージが見えてくるものもあり、「見る」という行為に改めて考えを至らせてくれます。

さらに、藤永さんは、こうしてできた作品を壁にかけて展示するだけでなく、敢えて裏から光を透過させて見せることにも取り組んできました。今回は、展示室5、6、7、8をつなぐ前室の奥に、このタイプの作品を展示していますので、ここにも注目です。



△前室の作品《foliage[1302]》（撮影：林育正）

ここでは、作品の背後がガラス壁になっているため、自然光が入り、天候や時刻によって、作品の色が変化します。通常美術館の展示室では、作品保護の必要から自然光を排除していて、作品がよく見えるようにと工夫された人工的な照明も、結果的には作品に一定の「見え方」を与えていると言うこともできます。これに対して、藤永さんの作品は、作品が与えられた空間に存在する「もの」であり、そうした環境の影響を受けて見え方も変化する存在であることを積極的に示しています。「実際にそんなに見え方って変わるものなの？」と思った方、ARCHで展示中の《foliage [1302]》をインターバル撮影し、動画化したものをこちらからご覧になれますので、ぜひ見てみてください。

これらの経験は、小さな作品画像を見るだけでは、決して得ることができません。ぜひとも会場に足を運んでいただき、作品を前にして、皆さんの眼がどんな変化を捉えることができるか、経験してみてください。また、藤永さんご自身の最新のブログ記事では、作品のコンセプトや展覧会タイトルへの思い、また展示作業の様子について書かれていて、盛りだくさんな内容となっています。ぜひこちらもご

覧ください！

(SN)